

は大概の人には敗を取らないつもりだ。

實に樂しみある散歩意味ある旅行は、畫を始めてから半歳程経てからの後であつた。

さて自分が、いかにして横的の畫を始めたか『みづゑ』愛讀者諸君の前で自状仕らう。

さう昨年の暑中休のときであつた、友が澁、

田中と云ふ温泉のある地方へ旅行した（澁

と云へば今年の夏、大下先生、丸山先生、河合先生が講習をなさる由）その旅先から

僕の處へ寄こしたそれが、友の眼に映じて友の手に成つた途上の風俗や景色、畫は色鉛筆の走りがきて頗る簡單なものであつたが、人居れば人、山あれば山、河流るれば河、僅はがき大の紙面に溢るゝ様に活躍して居る。其友はなかなかの文章家であるが其文章で顯すことの出来ない處が其畫に顯はされて居る。

自分はさながら其友と一處に歩いてゐる様な、實際其友が路傍の石に腰をおろしてスケッチなどして居るところがありありと見える様な氣がして、日毎に来る其はがきが實にうれしかつた。

誰もそうであらうが、自分は友からの音信

それが非常にうれしいもの一つである。

學校から歸る、すぐ机の上を見る、その時

に封書なりはがきなりあれば、もうそれを

開ひく見ない中は他の事は何も出来ない、

それに反して、机上空しくとあれば何だか

心寂しい。

こまごまと記されたのも云ふべからざる情

熱の籠つて居るのが感じられて心嬉しい

が、

此五六年來繪葉書が流行して、遠い地に居

る友からなど送らるるを見て、其地の風景

或は風俗習慣など、色々思ひやられて、音

信なるものの樂しみをまた一層深からしめ

た。

ところが前に云ふた旅行先の友からの音信

に接して、今度は層一層の愉快を感じると

共に、畫に對して切實に其興味を識つたの

である。

こんな様な理由で、常々友から情ある御手

紙ばかり頂戴して居るのも義理が悪い、だ

が生れつきの不文と來て居るから、洒落た

文句を申上ることも叶はず、て畫でもかい

てやつたら少しは面白からうと云ふので、

いよいよ七十五錢（上田では）の水彩繪具を

奮發することになつたのである。

爾來一寸一年にはまだならんが、其間牛の

歩みにはまだとても追いつかない、併し蝸

牛の歩み位の進歩はあつたと、これは自畫

自讚だ。

評

●主婦の職分壹の卷

麴町下六番町 新婦 人社

四六形百六十頁（二十錢）

内容は題名の示すが如くあらゆる方面の名
家數十氏の家庭に對する説を集めたもので
中に松方伯の「女子と美術心」の一説の如き
は尤も有益の文字である、繪畫を以て徒ら
に遊戯三昧に思つてゐる人々の陋見を打破
して遺憾なきは、此人にして此言あるかと
疑はしめた。其他何れも再讀の値ある文字
に富んでゐる（H O）